

## 21世紀の日本のかたち（89）

### 建築について（3）

#### まちづくりと建築・戸沼研究室の設計



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

### 1. 中新田・小なるは美なり - 田園の中のまちづくり

宮城県中新田町（平成15年4月小野田町、宮崎町と合併、加美町の一部になりましたが）は東北の山並みに包まれた美しい田園地帯に築かれた2万人ほどの小都市です。ここに鳴瀬川が流れ、縄文の昔、数千年前から豊かな人間の居住が展開されてきました。

中新田は巨大を志向する現代文明に抗してヒューマンスケールなまちづくりにこだわり、風土と歴史の織りなす持続可能なまちづくりに取り組んでいました。

中新田には素敵な憲章がありました。

「夢海をめざし 愛ふるさとに帰る 鮎の

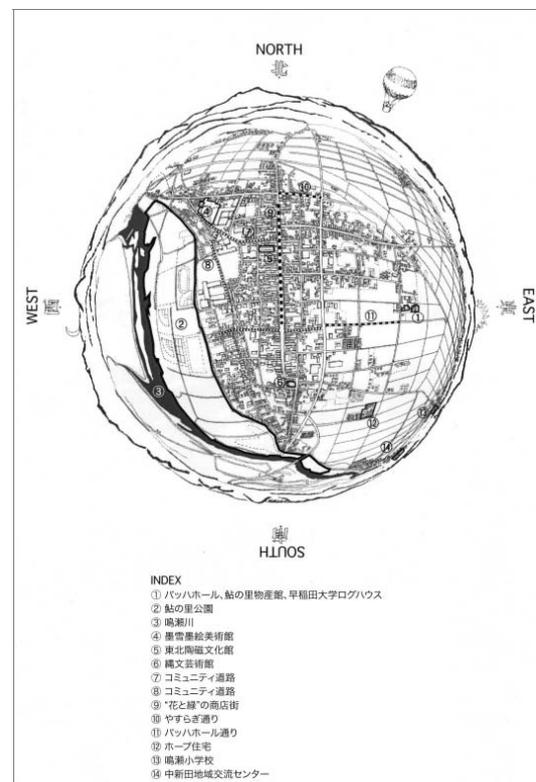
りんれつ  
凜烈 川よ語れ」

この憲章は加美町にも受け継がれております。

このまちづくりの推進者は、町長本間俊太郎氏（1974～1988 在職）でした。町民の厚い信頼を得、建築家、都市計画家などをアドバイザーとして、一連のまちづくりを実施しました。これについて、いくつかのハードな事例をあげれば、次のようなものがあります。

- ・鳴瀬川に魚（特に鮎）の生息しやすい生態的な川づくりを手がけた。

図1 中新田のまちづくり



- ・農村集落や都市部の景観調査を行い、風土と歴史を大切にする景観計画を作成した。
- ・文化活動の場づくりとして、田園の中に音響抜群な音楽ホール（中新田バッハホール）をつくり、音楽の盛んなまちとした。続いて、古い農家の米、酒蔵を活用して美術館（縄文芸術館など）を開設した。
- ・みちづくりとして、自動車路を人間のための街路に変えた。中心商店街の花と緑のモール

は商店街を明るくし、イベントの空間ともなっている。

- ・学校づくりが重視され、鳴瀬小学校も設計時から地域の人々が係わり、開校後、コミュニティの中心的空間とし活用されている。
- ・公的共同住宅も日本の在来工法によるユニークな木造でつくられている。

写真1 中新田 花と緑の商店街



この一連のプロジェクトには戸沼研究室も深く関わることになりましたが、これについては現代日本のトータルランドスケープとして、2000. 10. 21～2001. 1. 14、ロッテルダムのオランダ建築博物館メインホールで展示紹介されました。

### 人間尺度

私は、ひよんなことから中新田通いをすることになりました。あるところで、まちづくりについての話をしたことがあったのですが、話題が景観問題に及び「最近の都市の景観は乱雑化する一方で困りものだが、美しい田園風景もま

た、何か落ち着きを失い、荒廃しつつあると感じている」、「人は見るものようになるものであり、人の心が荒廃しつつあるのではないか。もういちど人間の原則に立ち返り、人間尺度でまちづくりをすべきではあるまいか」という主旨のことを述べました。その時、その場に当時の中新田町長本間氏がおられたのです。二・三議論を交わし、拙著「人間尺度論」を差し上げました。このことがきっかけとなり、いちど中新田を見にきませんか、と誘われ、田園風景が荒廃しない方策、町の景観づくりに意見を求められることになりました。批判をした者は提案せよというわけです。私が初めて中新田を訪れたのは1979年のことでした。

町は農村集落の連合である鳴瀬地区、役場や中心商店街のある中新田地区、山林部を抱えた広原地区の3地区から成り立っていますが、この3地区について、1980年から83年にかけてそれぞれ景観計画を作成し、提案しました。

この間、春、夏、秋、冬と、研究室の学生たちや、研究室の卒業生で建築設計事務所「アトリエ海」を開設したばかりの、中村展子、塩脇裕の両君ともども、町の人びと、役場の人びとと交わり、みっちり東北のこの地域を調査しました。

後藤春彦君(現 早稲田大学建築学科教授)は、都市デザイン企画専門官として、町役場に在籍(1987～1989)し、現地での指導にも当たりました。

## 2. 鳴瀬小学校 - オープン・コミュニティスクール

そんなある時、鳴瀬地区の小学校の新築校舎の設計を依頼され、戸沼研究室と「アトリエ海」が共同でこれに当たりました。50年ほど前に建

てられた木造の本校舎が老朽化し危険になったための建て替えであり、また、本校・分校統合の新構想が求められておりました。生徒の数は250人程が想定されておりました。

町の人びととの議論の末、オープン・スクールを採用することにしました。これは形式として、昔の寺小屋式、学年別画一教育ではなく、一人ひとりの子供に合わせて教えやすい、システムと空間をつくらうというわけです。昔と違って兄弟の数が一人や二人では全人的教育の仕方に工夫が必要だということから、1年生から6年生までが一堂に会食できる食堂を計画しました。これを天空に突き出すように設計しましたが、窓から周辺の山並みや田園風景がすっきり見えて、気持ちがのびのびとする、これに合わせて「私」が、中新田の一点、地球の一点に存在すると自覚して欲しいと願いました。

昨今、教育環境としての家庭や地域はすっかり様変わりしましたが、家庭、地域、小学校の相互補完、三位一体化も必要です。

鳴瀬式オープン・スクールでは、①廊下との間に壁のない教室、②外気と様々につながる、③地域に開かれていること、を考えました。

校舎全体のオープンに合わせて、L字型クラスコーナーを設定しました。クラスコーナーはそれぞれ中庭に接しています。冬場の北西の風雪に対して、北西にコンクリート壁の体育館を配し、更にはこの地域に伝統的居久根（屋敷林）を設けるしつらえとしました。なお、旧校舎はコミュニティ施設として再生活用されました。

9月も末の先日、久しぶりに鳴瀬小学校を訪ねてみました。秋の晴れた田園風景の中に火の見櫓のある鳴瀬小学校が見え、近づくと昼休みらしく、校庭でボール遊びに興じている子供たちが元気に挨拶してくれました。構内を案内し

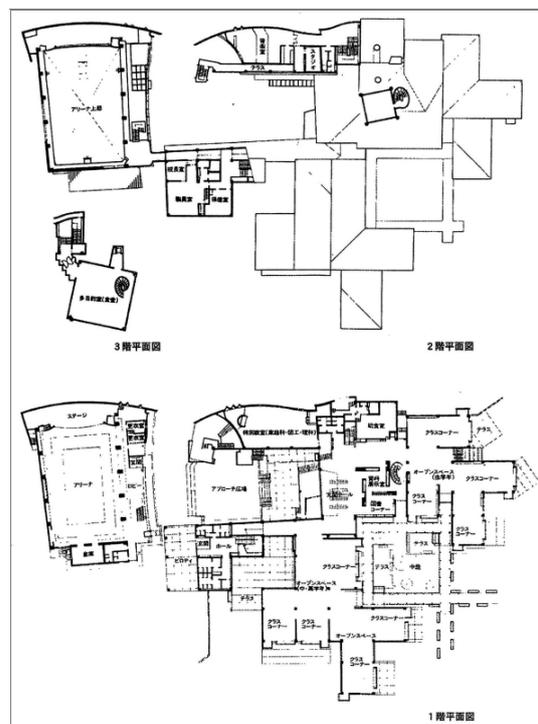
写真2 鳴瀬小学校 南面全景



図2 鳴瀬小学校配置図



図3 鳴瀬小学校 平面図



てくれた校長先生、教頭先生の話からは、先生方はじめ皆がこの小学校の特徴をよくつかんで活用しておられる様子が伺われました。例えば四方の山並みと田園風景がよく見渡せる天空に突き出した集会場兼食堂では、毎年11月頃には子供たち全員とともに地域の人も協力して新米を食べる会が開かれるとのことでした。

鳴瀬小学校が20世紀から21世紀を跨いで生き生きと活用されている様子に触れたことは、設計者にとっては嬉しいことでした。

### 3. 宮城大学

宮城大学（大和キャンパス）を十年ぶりに訪れました。この森の大学は秋学期が始まり、男女の学生たちで、アフリカからの留学生も交えて賑わっておりました。池に映る大学キャンパスも秋の気配の中で健在でした。

宮城大学は「21世紀の東北・宮城の発展を担い、わが国及び国際社会に貢献できる人材を育成すること」を目的に掲げております。

大学創設は平成9（1997）年、「看護学部」「事業構想学部」の2学部を設置して県立大学として開校しました。現在はこれに2005年、旧宮城県農業短期大学を改組した「食産学部」（太白キャンパス）が加わり、三つの学部の上にそれぞれ大学院（MC、DC）が設置されて、内容の充実が図られています。2009年には公立大学法人化しています。

宮城県（本間俊太郎知事当時）は大学の創設にあたって、平成5（1993）年県内外の関係者、有識者を集め、創設準備委員会（西澤潤一東北大学総長（当時）委員長）を設けましたが、私はこの準備段階から地域計画・建築設計系の有識者委員として、このプロジェクトに参画することになりました。新設大学の学長予定者とし

て、野田一夫多摩大学学長（当時）も参加しておりました。

この時、日本開発構想研究所も大学設置基準に見合うように、新設大学の設立に必要な業務を支援するコンサルタントとして参加しています。

### 建築の基本構想

宮城大学創立準備委員会における新設大学の内容面の検討に並行して、私は大学の建築基本構想・設計のとりまとめを指名されました。

県の建設関係者と初めて黒川郡大和町の建設予定地を見学したのは平成5（1993）年6月でした。

敷地は標高100m程の丘陵地の一角にあり、都市側からの幹線道路に接し、北に向かって視界が開けて東北の山々がゆったりと眺められました。

7月に私と共同して建築計画実施設計を担当する設計事務所に佐藤総合計画が参画し、県庁内に大学設立準備室が設けられました。

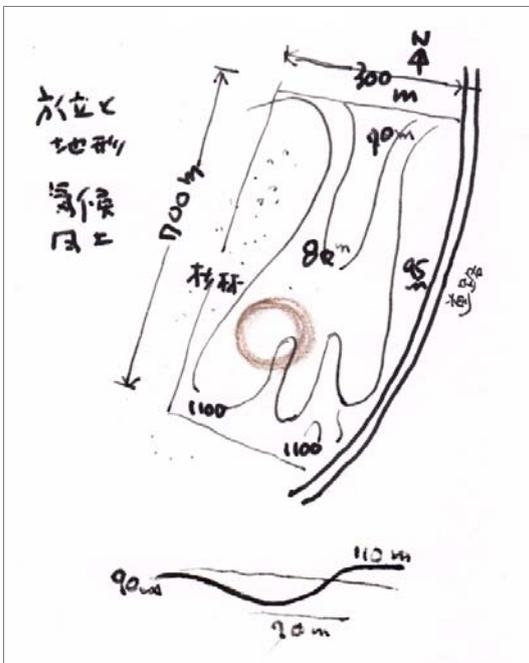
私自身、U研究室の大竹十一氏の協力を得て、戸沼研究室の院生たちと基本構想のエスキース（計画初期時にコンセプト、概念図等を簡易にまとめ、検討する際の資料作成作業）を重ねました。当時の私のノートに建築エスキースの始めとして、敷地の条件と大学施設の内容を記したものが残っております。

#### 【'93.8.16 エスキースノート1】

- ①宮城県黒川郡大和町 小野字鉤岫 地内
- ②敷地面積 198,900 m<sup>2</sup>=60,273 坪  
≒200,000 m<sup>2</sup> (6万坪)
- ③施設面積 34,500 m<sup>2</sup>=10,454.545 坪 (約1万坪)

- ④施設費 140 億
- ⑤学生数 1,120 名  
 観光学部：観光（経営）学科、観光開発学科  
 学生 800 名  
 看護学部：看護学科 学生 320 名  
 注）当初、事業構想学部は観光学部として考えていた
- ⑥教員 120 名、事務員 40 名 計 160 名
- ⑦将来構想 大学院設置、他学部の設置（産業学部等）
- ⑧駐車場 400 台

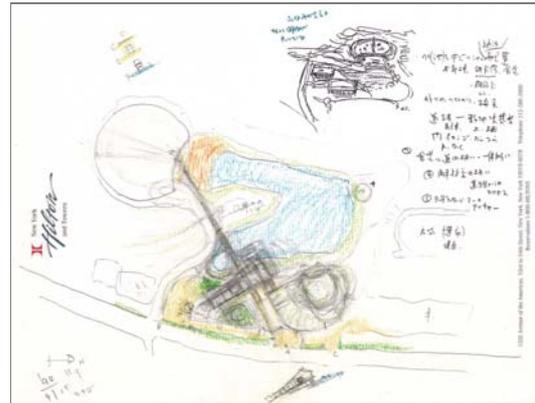
図4 宮城大学(大和キャンパス)エスキース1



【'94.4.15 エスキースノート2】

- ①水（人工池）を中心とした施設配置  
 本部棟、体育館
- ②外とのつながり、接点  
 道路 - 敷地境界線、駐車場、木、柵
- ③食堂と道の扱い 一体的に
- ④開放系の扱い→道路からのアクセス
- ⑤ランドスケープ・アーキテクチャ
- ⑥直径 100mの円形本部棟（大学都市）は馬蹄形の屋根で包む。土地へのダメージ最小。

図5 宮城大学(大和キャンパス)エスキース2



宮城大学づくりのコンセプトと設計

完成した宮城大学（大和キャンパス）については、竣工時いくつかの建築雑誌で紹介されましたが、その中の一つ、「新建築」1998.11月号に私と佐藤総合計画の小宮朗氏による一文があり、ここに再掲しておきます。

コンセプト：<sup>コスモロジー</sup>森と水と人の宇宙論

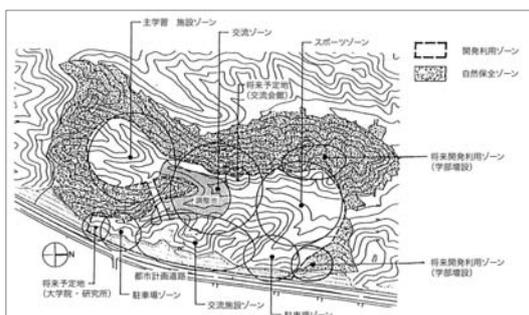
はるか縄文の時代から、東北の人びとの生活と文化を育んできたのは「森」と「水」である。この東北の自然に企画された宮城大学は 21 世紀を切り拓く若い人びとの集まる「知的空間」、未来の時空を内包する「<sup>コスモス</sup>宇宙」として世界へと輝いてほしい。これは県の総合計画である「<sup>コスモロジー</sup>森と海と人の宇宙論」を引き継いだものであり、設計の基本理念でもある。そして「日本一の福祉先進県の実現と地域産業振興の起爆剤」（浅野史郎知事 竣工時）「ホスピタリティとアメニティの究明と実現のための新しい実学の開発」（野田一夫学長 当時）という要請と重なっている。宮城大学は看護学部と事業構想学部の二学部より構成されている。

土地利用と施設配置

宮城大学は仙台の北 20km、東北の山々と連なる森の一角に位置する。地球上、ここに緯度・経度・方位をはっきりと刻むこと、雄大な山並

みとしっかりと対峙すること、起伏のある地形を生かすことを土地利用の基本とした。併せて自然保全ゾーン、開発利用ゾーン、将来の利用ゾーンに敷地を区分し造成の方針とした。施設の配置については自然環境への負担を小さくするために集約的分棟配置を試みた。敷地を特徴づける南側の馬蹄型の尾根に覆われた「森のゾーン」には本部棟を、東側道路寄りの「水のゾーン」には地域との交流のしやすさを配慮して交流ブロックを配置した。開発にともなって設けられた中央部の調整池は森や丘と共にランドスケープの主要素であり、施設配置の寄りどころのひとつとなった。

図6 宮城大学(大和キャンパス)土地利用ゾーニング



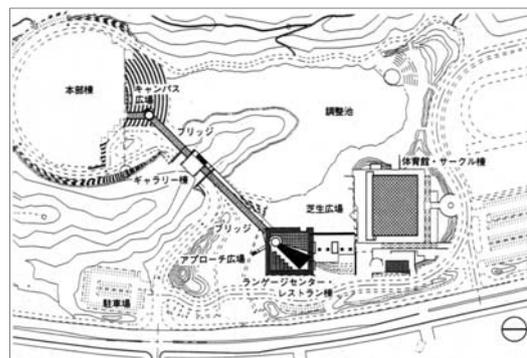
### 施設的设计

本部棟は逆円錐の一部を切り取ったかたちのまま森に沈めた。北側に大きく開口をとり、水面の陽光を透かして遠くの山並みを望むようにした。円形の大屋根は第5の立面であり、文字通り宇宙と呼応する。この中に大学都市が息づいている。ランゲージセンター・レストラン棟と体育館・サークル棟は水辺に建ち、明るく眺望を楽しむよう緩やかな人工の丘と一連のものとした。

### 大学のシンボル：「時」

古来、大学には時計塔がつくられたように、宮城大学のシンボルも「時」である。このキャン

図6 宮城大学(大和キャンパス)施設配置図



パスにはアート計画のひとつとして日時計や水時計が動いている。本部棟も大きな時計である。日々、年月、季節の変化と共に森と水のキャンパスはさまざまな時を刻み続けていくことであろう。知的そして情念の空間としてこのキャンパスが人を育てることに役立ってほしいというのが設計者の願いである。しかしこれは設計者の意図を越えている。

(戸沼幸市+小宮朗/佐藤総合計画)

### 開校20周年(2016年)を迎える宮城大学

宮城大学は創設以来、日本に広がる少子化の波の中にあっても入学希望者は多く、就職率はほぼ100%を誇っている様子です。大学は学生と教師の教育研究の場であると同時に地域における知の拠点としての活動が求められます。

宮城大学では3・11の復旧復興活動の他にも大学内にある地域連携センターを活用して県や県内市町村のまちづくりの支援に当たっております。

来年2016年、大学創立20周年に当たり、世界を見据えて地域に根付くグローバルユニバシティとして、東北にあつて益々その存在感を増して行ってほしいものです。

図8 宮城大学本部棟 平面図

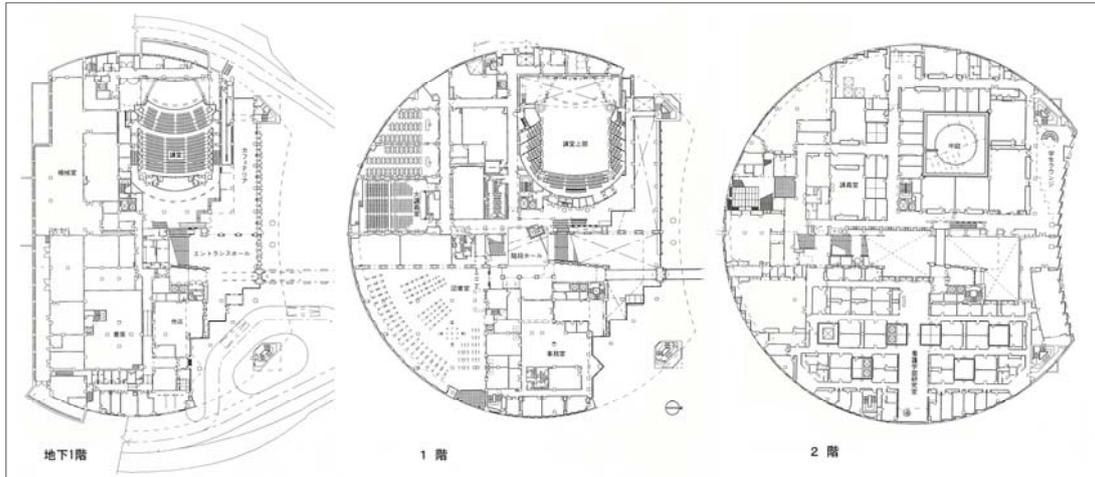


写真3 池側から見る宮城大学 大和キャンパス



写真4 本部棟北から南に駆け上がる中央大階段



※暮の「第九」の演奏や結婚式場にも利用されている。

写真5 本部棟エントランスホール前ピロティ



(2015. 09. 30)